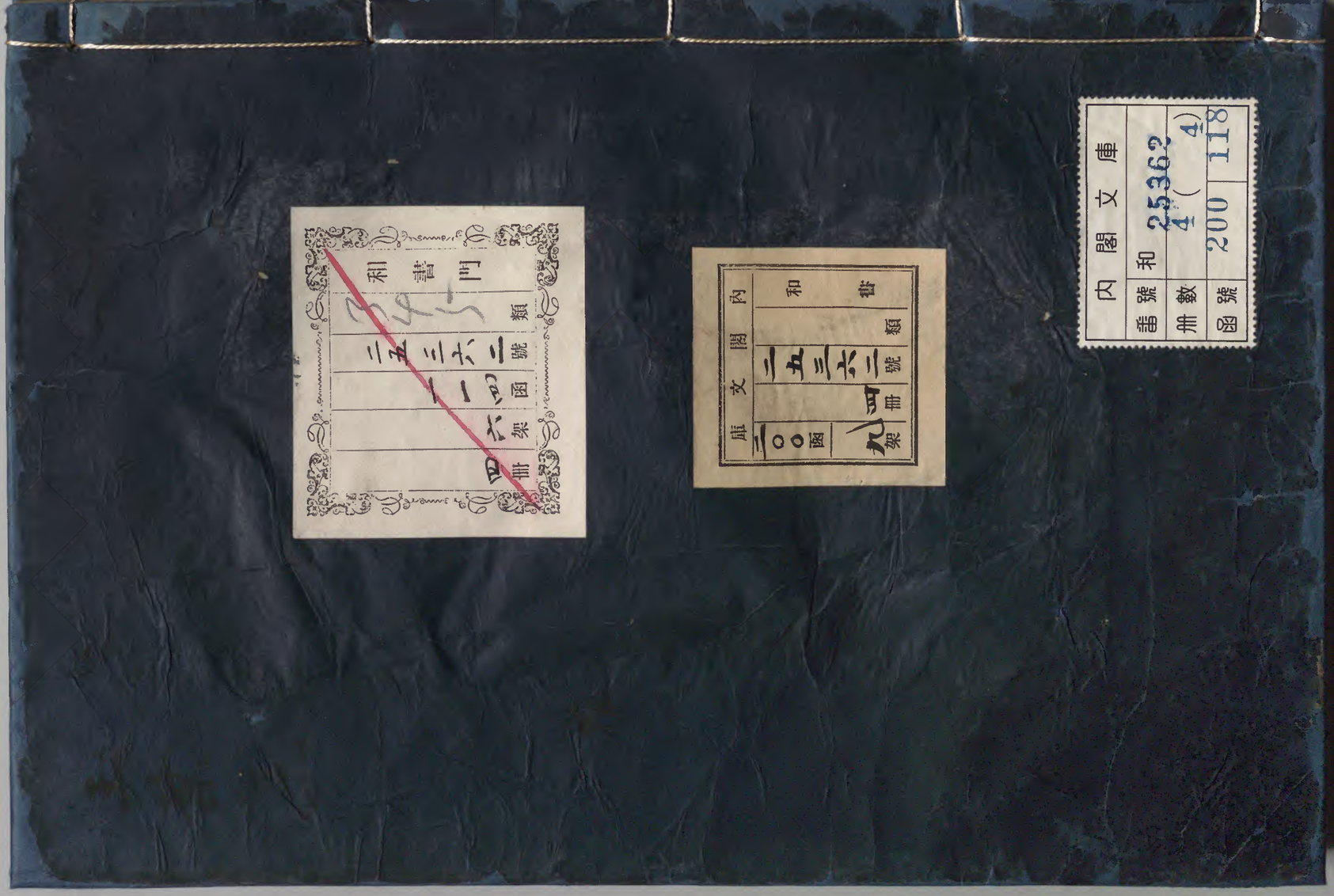
国立公文書館
National Archives of Japan



書籍館印

日本政府圖書

和學講談所
淺草文庫

玉葉和歌集巻第十五

雜哥二

題不知　讀人しらず

其日聖の淺茅りうへにかゝらおそふまゝをいふられめ　やも

春日社にまゐりける百首　何れ中に野を

皇太后宮大夫俊成

まゝ野ハ今日まゐかの其れ紅葉のさかは林蘇の時

雜哥乃中に里とよみ侍なり

從三位為子

思ふ事をいふ不思ひしさ無よりいとその里とかをとそ　むらん

世の中ハ常しきものと今そしるなれ都のうつろふこれハ
金石のおもしろ都をとゝくそしらみ給ひる
人麿
行波の志賀のあなたにしも昔の人にまたあはめやも
題不知
よこ人しらす
風をやこみなの浦に行こゝ身の前人さらぬ波ゝしも
寶治二年百首歌に浦船
常盤井入道前太政大臣
さすらゝ波の浦さく小年もへぬおまのなかせる浦の橋
雜奇乃中に海邊の心を

前大納言為氏
雖波ゝ波のたまりなるかゝ塩干に浦のおまの橋
海路名所といふ事をよませ行うもの
崇德院御製
色そにこれもあかぬ此時しへよう神の恵とあけ
題しらす
前大納言為家
ゆるまに小すさき物しり夕塩の見えたるにおまの袖も
故恵時藤
此夕へ浦の塩風ぬきなすて入海しろく波ゆるくなり
藤原隆祐朝臣

[illegible]

[illegible]

藤原粉景

夕塩のさはまませて澄江乃あまにかまはせて

[illegible]

菅原花秀

浦あれて風ちのかりいり塩に[illegible]

[illegible]

鶴植

浪さへ沖の[illegible]

人麿

武庫の浦にとまりあるしいさはりあまの鶴[illegible]

重之

みさとぬりあ[illegible]

けさこれはあまのかりも[illegible]

前参議為相

里としとよりはみとぬ[illegible]

名所三十首[illegible]

院御製

なくも[illegible]

雑[illegible]

中務[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わきりはうらに行そうなりかとの鴨杉原ゆきはやしらん
藤原隆祐朝臣
鴨のうゑ荷の浦乃朝ほらをわれたゝ波をもとゝみかり
平時綱
しらに塩小浦の社をも波とて宅をさゝゆるわしらに川の
寅治二年百首方に鴨窓といふ事を
源後平
わしらに川の鴨をもをくゆゆなり波しらに川のうゑ
月し時海眺望
前大納言為氏
清見かたうら出くれはいなをしれしほの無津は波しつかり

破巖
豊盛井入道前太政大臣
無津風わしき破へに立浪の立海岩れにぬつる海津風
新しらす
荷原親範
岩の様によせくはかつる波のまも打をとのとす破乃松風
寅治元年八月十六夜五首方詠をとれ侍
今の時名不明
万里小路前右大臣
沖津風更行まゝに鴨石をとつる月の新乃さやけさ
海急月
中臣祐春
いとふへきふのちそ在鴨石をとつる波にかゝふて音鴨乃月
賀茂忠久

山深くなるのつきぬまみえハまつ秋覚えよりあかつきこそまされ

前右兵衛督基氏

鐘のおとにたゆるの音さへぬ秋さひしき暁よりおもしろき

永福門院内侍

秋風よく時ハ月もこえわたる秋のあけかたの雲に

中臣祐世

うきハわか老の寝覚をさそふゆふけるもおもひこそすれ

源泰親

暁の鐘のひゝきに夢さめておきてのちよに秋ハなきかな

平時元

波の音なくきこえ明ぬなり秋ハはなるをきゝ覚るれハ出すき

前関白左大臣

むかしまてのとこる鐘まつ暁あさき里もなし

従三位為子

里の鐘をあけさハあさき山の端みえて雲そ

従二位兼行

前参議清雅

鐘の音のわかる山の明ぬるをみしらぬ松の下かけ

題のうた

読人しらず

わかれけさまて海原をこえて山の秋ぬるなとにまさる

山寺は往侍ける比夕日山に入て鐘乃聞えも
をとなくなりてあたれは笑ひ付はい

山田法師

見るまゝにふかなくも芳流なる入逢の鐘もつきたてぬ
なり

見しらぬ

西行法師

法にくと掴をふまうらうへくおりあはれなる鐘のをとかな

前斎議雅有

あさなれと老後の氣もありもきぬ山川を限う入れのかね

源雅長朝臣

[illegible]

前中納言經親

小川まくつきの山とをとん入逢のかねてはしらぬ長安の中

行生法師

あたれ文をかもりなりまたりあれとなきぬ命なりしに
あるき詩のことを代見てくと言つかうまつりける

時晩鐘聲といふことをよみ侍ける

前大納言家雅

ゆけとおもしてしみとぬ松原のおくより見えて入れのよ志

一溪雲鳥といふ事を

院御製

まれの夜なるかあまひ見えあるかしてかと申し
ろく光を分れた　建礼門流右京大夫
月をこそなるめなまして夏の夜のあきあれをこよひ思ひ
夜の心を　永福門院
ひとさ夜の山松風ハ行かけよも猶の夜ハ星の夜のとけき
覚しらす　従三位為子
をともなく夜ハ更をきて遠を此里の犬こそ知わかれ
院内製
さ夜更く宿りなの知たりしむらしかるか月乃至る
夜路とはかまりを

更ぬるかるに宿も志しまりて月の夜ハよあふ人もなし
寛治百首寄なりけり時夜燈
埃高拝院下野
宿ハあれて此人のひまもる山風ようむけりしさる孫やのさ夜　火
松明しかを　従一位為子
とりし火のさんさひしき国のうらふさ夜も更ぬる孫そ志る　夕
院新宰相
きゆるかとみてつる夜ハ此とりし火のまゝ孫さめそもおもし新　安
道助法親王家五十首寄に国中燈を
前中納言定家

はくと時り宮のまゝひ乃ありやとちりやしへ清

従二位家隆

消風して行る雲よりあれなまし我世史名ふ宮のまゝ史

鶯をさりて人とは奇ふませさせ行けるは雪

燈といふしを　院御製

面のをとれゆゆる宮はさきみくぬまぬはしあつまの行

従三位為子

ぬりしあるわさ秋の様やはしかりてなの清みりき灯の末

秋雨を　永福門院

時しらしさ秋の雨れをしき様さめ乃ふりしきれしう

山中雨といふ事を

山風の吹まとりとさく様に雨のうらなりなり

国院内侍

しつくまそはまくさわりそめぬ山陰の桂原うへは雨そきこゆり

山家雨を読侍る　従三位季子

折らしき桂の紫志なれ山る雨のしきりしさ山陰の宿

雨のふる日もりけり雨をいふ続けて

花山院御製

年へぬる宿をふるやといふ事は雨のさりしぬるよそ見れ

二條院御時御撰初華の口後長官にそつる

玉葉和詩集巻第十六

雜哥三

和元百首奇なけるに松

前実白太政大臣

よしかんぬる末の松になれのこやしかゆふ世の昔をもし

湖邊松といふことをよみ侍ける

藤原為道朝臣

よせくる浦風あらき沖に波にしつえを知るは志賀の浜

浦邊松をと

従三位為子

波のうへは雨に寂てなかやう沖のしらはに松うのこれる

若り乃まへに松のさそりけるをそよみ侍ける

西行法師

谷の戸にひとりそ松もそうける我のこ友ハなれなと思へは

ひさしへて我後世をこへに松は思ふへき人もなれ方を

慈しきこと

市原王

そこ川雲いて世久ぬる嶋風の花にしをあるハ年ゆうきも

貫之

雨とのこぬる松風は雪ゆきてこと思ふ人もぬきをそ

波よする岸に年ぬる松の葉に久しきこと雅かしき御事

亭子院西川に招しましけるに江松老といふ

九条良太后女

庭の面乃一来れ松を吹風よいく村雨の心をやすらん

従三位親子

きゝもひぬ折しの松を吹き渡る嵐にあり渡入あひの心

従三位為子

風さにも折縄の松を折やそて夕のとけき山かけの雨

山家の心を読侍とる

前参議教親

なかめやる朝のうさハ日新そ此山もとハまつの雨ふり渡

山家夕嵐

お大僧正慈順

山ゆりを伸ふ心の種乃おつきそ秋の嵐の意をさひしき

山家の心を

雅家忠景

山里ハ志りしき夏もみしさりされて海ゆ心者の松風

松尾社方合ハ山家夕を

如願法師

山ゆりき里のさるへ夕ゆ地ハ入れの種れ都ハそ有ゆ

赤元百そ可ハ山家を

前摂政良大臣

ひしさハ思へのいかの秋の夢松風なりてをとつきもなし

入道お太政大臣

山おしの色ぬとしふ夕葉にをれて作りて初の松の枝
[illegible]
泥一位教良女
入りこの月をくれきけ来の戸に明ぬ秋ふかき嵐をきく
[illegible]の家にて秋方よみ侍りけるに
右大臣
小倉山初瀬の雨にをけまいけるぬ月うかく深
[illegible]の後西園寺にてよみ侍りけり
営整村入道前太政大臣
なかりをハ岩木につをてゆふまもあらさらん世のあれまくもおし
いはといへん夕の雨にきこそてんまり住山乃松風のをと

山家の心を
光信朝臣
[illegible]ひの身にあらましにおもなれて住ふりまり山のおくなる
前中納言実香
[illegible]世のうきにはしひ入て深山の月をひとりまり
[illegible]元百首方をかけりに山を
開白前太政大臣
山ふかまくれかりに居なん先よりおくの岸にかけし
[illegible]百首方よみ侍りけり
前大納言為家
山きはの田中乃来に[illegible]人に[illegible]

法城寺入道前摂政清水にこもりて侍けるに
つかはされける
花山院御製
都のさまもいかゝ聞らん我ならは袖ぬれまさる時にまはれ
亀山殿に御幸ありて山寺を思召て
月花門院
いくたひかつもりし嵐の山の岩ねの松に志ら雪
高山寺にまうて侍て
権大納言公基
高雄山清滝川をよこにみて谷深からむ松の尾の道
題しらす
新院御製
嵐ふけしゆふへの岩かとやたちよりて松のこ陰の苔の下に
あさましう人のをとせて見れは山寺にすむ人ありとやは
思けるをりに
和泉式部
さらぬたにかなしき山路もあはれなるさわるゝのうらみさせを
千五百番歌合に
後鳥羽院御製
里人のかりにふける権柴の露ふかくしも山おろしの風
建保元年内裏歌合に山夕風
前中納言定家
滝の音も松に吹くなる山風にかはるやいかに袖ほす山人
山家乃心を
順徳院御製

山里にて夜ひるのをこゝ過きて

道命法師

足川の山田の苗を乃をこゝ為みしまわらぬ緑さめをもとる

新元百首寄生時田家をよみ侍りける

従三位為子

にかむしまふ村の山田乃苗をすしふいとへやこれはかりそめの世そ

左を大将実兼

いはりさす外面の山田に風ふきくひぬなりこのをこゝ侍ゆる

閑居の所を

前中納言定家

のこゝ村かゝる末葉の色なりてまゝ月日も忘れぬ宿りす

入道前太政大臣

花の君末の栄時面のいくこせを身はふりさしれ庭にこゝろ

鳥之条にてよみ侍りける

女御厳子女王

我なりて又うちたゝふ人もなき草をなりあてそ侍る

渋海公の家乃池をよみ侍りける

赤人

むり鹿の鳴るきつゝこはまふ池のなきけにこゝさはる

雑寄の中に

前中納言定家

草をしひのさゝれ鳥ふ草以くよの宿とあれかさてなん

百首哥乃中に宗房の心緒

恒三位為子

おもはしき清茅ヶ嶽に月の新うれしかりけるに人間

題しらず　　中太后宮大夫後藤

草の庵に心をとめ門いつかまちやそ家方もすまし山ともしらん

うら山のむかし此庵の住とへは郷のさ門に名をあらはす

伊豆藏住

苔のむしを折たの松は来さうてみてまもわらぬ故郷の庭

寂寞業門人不到と思うんを

大江宗秀

やまぬ山を宅此庵の東乃さを人はをしせくなく雲風

雜哥の中に　　前中納言定家

さしひさう犬乃ふしをそ志しけるけりなくの人此家ぬ

寛治百首哥に里行を

前大納言為氏

年ゝかさと此家ぬすゝん所さ山のふりとしめくる行の一村

慈鎮和尚乃れむるよおとへん行のそれうちに

まゝ後の世をしひをくかまとうみ行ひ事を

思ひつゝをて

慈道法親王

後のよ我ゆいをきりん吳行のそれ来まそもあわれとは
三首御前の中に行を
後嵯峨院御製
山君の御世りしと吳行のまゝ思くまそもいそいそ
あえ百首前におなしふを
前実白太政大臣
くれ行のうれ昔も思されて忘れぬふしのあわくも
見しらす
新院御製
その世にて我恐しかれもしきや我家とみし座の吳行
題をさくりて人々前つかうまつりしついてに續ぎ
院御製
田面より山もとさしてけ鷺のをしとみまはいとうかれ
見しらす
後京極摂政前太政大臣
夕さ雲木ゆふ雨にまじ鳴の猶夜よりふかさまさ
後京極摂政家に百首前よみ侍りけり
寂蓮法師
鶴のうちも打うしやまし山かれ身のおとくまそ夕かの宿
小さ鳥のうつ乃いまさかぬ我に恐やのなく
ありしうをおもれにしひ乃にまさまくめ此子を
うしなひておやくなくをきてて

玉葉和歌集巻第十七

雜哥四

題不知　伊勢

武蔵野の草葉にやとる白露のいく世をへき拘るとなく
世のとうなきはれにやとれる月を見て

前大納言公任

世中ハ夜ハ屋とまとる月なれやまとみ同へ見ぬかな

題しらす　雅成親王

たまゝぬ人の家とあしのの山さくらもやまん
花山院かれさせ給てはしさの事をてく又乃日
殿上にはしらぬ人にはしらしまる

道命法師

りつもに明るの野へにいさ行て宿をとるまとそうなん
東三條院かくまさせ給ふけり又の年の春いさく
かそ見ゆる夕雲に人のもとへはかりしまる

雲式部

雲のうへ乃拘ふ雲ハ雪深にかとむ雲へあれなるかな
小野内侍なくなりて後よみ侍まる

和泉式部

あひにあはて拘ふ雲ハかひなし花も家もめかしされハ

母の服に侍ける法山里におこりぬそ侍けるに正月
司召なとゝ過て宮のかりたるあしたの人のとゝかしひて侍
せる程にまれつゝりたる　皇太后宮宣文後成
思ひやまさ其の日りも照しぬ源山の里に宮乃ゆきと
愛離院かれさせ給ての去人を奇よ見侍せる
其夜を　前大納言公任
苔まも未も多つさわたる其面にくらのこ海さう萩の衣に
雅子内親王のたひに侍ける法面のかり日たしらしの
りしへつゝりしをる　藤原高光
ひとりもしにかゝる昔面やいかしへをこゝかる秋の志はくなるしん

有名会院かれさせ給ける去檀中納言實守許に
梅を折てつゝりし侍そ　三条へ道左大臣
いそかくうき世をしてて梅の花ことしも折りしかゝる嘆ん
おなしは花の萩をみくよ見侍ける　太政門内大臣
萩のこゝろ花さまあるを思かなと此其たりとおしかりせん
むすめの女御うせくはおと人まり侍ける也て
内にさふらぬ女房のりしへはかしをる　清慎公
九重も花のさかりになるなるにつゝ身ひとりやまのこそ
なる

鄙しらを　　象山院御製

いく程なりしへてこん山さくら花よりのつき命と思へる

を清實白なれてはこりわかて年久しく成給ん

ろ法花寺よみ給けるの中に

法一位兼教

雲志ぬうき身も所いかへにつゝねし枝の花よりつゝ

菩提院に南りて花見給ひ所にを東開白

寺よみ給つゝりまして書つけさる屏風の給ひ

長まみてなれハ　　鎮長花前将政左右

なき人と花ゆへ今ハ思ひくも枝の春ハ我も今の

ます

木雀院の御事と思ひ給ひて白門殿に御しまし

ひろ法四月許に御前の花ハちりそて青葉なり

梢とり給ひして　　上東門院

おしまれしこそ志の花ハ殿もそくいとふみなりの兼ねと給ひ

九條内大臣なれ給ひ給ひけるをとひ給ひて四月より

て後法性寺入道前實白のりしへ上つかりしを

皇太后宮太夫後成

いかにいひ以かにとりんとせふさにくもつさて後もくれに紀

本院女御なれて又の年四月一日給ひ給ひけり

つかりしけり　　藤法名

堀河院宮白腋に結ひつけける時流れにけるに

本院侍従

まれさへ袖に露けき夜衣君ならてまたさきさへ[illegible]

覚昭法師

春[illegible]くはすの上り[illegible]

安嘉門院流されさせ給て[illegible]の御仏事

[illegible]

門院の御匣のもとへ申つかはしける

後三位為信

[illegible]

式乾門院御匣

[illegible]

八月のはつかの比[illegible]

月は[illegible]

法印静賢

[illegible]

後京極摂政の[illegible]

出羽辨

[illegible]

兄弟よ三親王を過て歌侍るを平の盛とも
くらつへひ侍れハ中流なりけり

清原忠良

うれ身をとはかなきをすもかゝる世のなかにうきこしやなや
なし

平兼盛

天暦の御時の歌合に人を思ふらんといふことを
よむとて侍られて侍りける女のもとに前大納言
維盛ちかくなりける事をきゝて都に
ぬくいかてかそ海にていひをとゞめ侍りける女に

前右近中将資盛

あかつきのあはぬなかゆゑあはぬうらよりかくうきことをみつるかな
紀伊二位身まかりにける後

西行法師

流れての名にこそたてれあはれあはれ世にたへたる
和歌の浦の流れに数多入りて昔の人に思ひ出なる
女御熈子女王かくれて後よみ侍りける

朱雀院御製

ひとりねにありし昔にかはりて狩衣の床をとりあへ
紀伊国三穂石室にこもりてよめる

博通法師

をのつからをれたんとはしもあまとしたくさまろ数をもてあく
毋のたてに眼めくとてよみ侍りける
女御前原生子
今はとてうみの衣ぬき捨て久かたる人さんらしろを
趣義門院かれさせ給て後後深草院の御
忌日に法花堂へ御幸ありてよませ給うをり
院御製
おうまくはまけうしなと詠て掲ふりて深草の
院三位為俊才まうりてとてのは前大納言經
任をくめ侍りける一品經の奇れ法いくに懷舊を

前左兵衛督範藤
うき時とまうれまては思ひしに於明し月日うまさみなり
大炊御門右大臣父の服のうちに母人なく御ぬと
ゆてこふひにつかはしとて
西行法師
かさ孫さう前の衣をたまわぬくふ乃ちもうわよとて思ふ
右大將通房身病ありて法事の日服きさらん人を
を見て
左法門右大臣女
見渡せは三れ雲波の衣手は幸ちゆまつけく拘うかなし
なき人を忘て奇をくねりけり人の世事に

躬恒

なれをしれ君にこゝろめ年ぬまはあるもなりしき抽れ
小式ア内侍身まかりにけり此人につかはしける
和泉式部

ぬまはうし面しとても又いかさん天の下より外のなけまは
久安百首前に　上西門院兵衛

いつまでとのとゝ小抽をしぬん時のまゝ行まはしぬいのらに
後一条院中宮かくれさせ行にけり此限なくかれ
しき文のうちに右衛門七条后うせ給ておれのも
まさりといひ乃んも思ひ出られて中宮亮兼房卿下
に申つかはしける　お羽辨

めのまへにかくおまはしつる伊勢の海をよそれの渚と思ひ乃る
ゆ　菅原兼房朝臣

いふしへのあまれ住をんいせの海をかゝるなきさはあしとそ
おもひし流の御事に世代うむさてよめる
法三位菅原豊子

をくれしと思ふ心にうむをとも此世にしまり程そうなしき
おなし此人とおもひくさ海へ行をきて
後一条院少將内侍

今までに世にありつんと思ひぬをそむくあまをそれぬる

讃岐國にてかれさせ給とて皇太后宮大夫後成
よみをよとて書をとゝせ行をり
崇德院御製

夜の世よなれしなりくらすてさりんあしたよあふとも
三条院太宰權帥經房に御笛をあつけさ
せ給へりけるをかくれさせ行て後見おてきさい乃
高よもてさゝりてまつらせとてをこし候ふし侍
けるをやて
枇杷皇太后宮御匣

先行の山世俗なくおきみし君のかたみのおそれなしき
をまつさと申志やうのことは深草院に侍けるを

よハ永福門院へ申させ給へきよし申をとゝせ給れ
たりくきさせ行て後れ忌れとてくかのれとを
らせ給とて
院御製

むけさのうれさ乃結の後しまちいまる(ハイ)新見の様まそ
御申し
永福門院

いかしへをかくる波のむけさ此かたみの形に様をそらへぬる
世中たゞ所きまゝ者はくやうけ所前栽の露を
風の吹こしけるを見て
後三位為子

人の世ハ行うたゞれきの風にとゞまる露ハまるもをきけり

三条

讃岐國にてくれさせ給とて皇太后宮大夫後成
よみをよとて書をとらせ給とて
崇徳院御製

君の世になれしなりくらすてさかんあらはあふともなる
三条院右宰相師輔卿に御笛をあつけさ
せ給へりけるをかくれさせ給て後見せきさいの
宮にまてさかりてまいらせとてもとし候なりし給
けるをなて
枇杷皇太后宮御匣

先行の山世俗なくおきあし君のかたみのおそれなしき
をまゐさとゆきやうのことは深草院に給けるを

よハ永福門院へ奉らせ給へきよし申をさせ給へれ
たりくきさせ給て後ハ忌れとてくかのれことを奉
らせ給とて
院御製

むけさのうれさきの名のたえしよりいまるハイ形見の様にそなりて
御申し
永福門院

いかしへをかたる波の玉門さいりしみのおそに様をそらへぬる
世中たゞ所きまゝ背くなりけり此前栽の露を
風の吹えてしけるを見て
従三位為子

人の世ハ行うたゞれきの風にとゞまる露ハまるもをきけり

平貞時朝臣男まうらて後中をさて給ひ事
ともをやて讀給ひ　藤原利行
おほし世のめくしきえぬと歎しは詠まくのうるまさけをそきく
杖は人の身まうりにけるを歎給ひしに就なくしせ
のおもし月日をめくりまふれは
　従二位行子
しひきやしとせの煙をもしきてもふ文神に寄りもんとは
永元三年神無月の比亀山院に忌にこもりて
よりみ給ひ
　前右を大将に那
おもふ人は杖のうらみをかめくも時雨とかるに涙なりけり

権中納言俊忠遠忌に遇り巾野の墓下の堂に後
かりて夜ふかく後給ひしに寄の志けりけれも
　皇太后宮大夫後成
かまつか神の志つくかる歌杖のなかるく然後の花の寄
白川院にてれさせ給ひ杖より見給ひ
　法性寺入道前実白太政大臣
いかしく清かし杖の志に寄をもちそれ人の事をみるむ
歌を苑前拾政をれ給ひ杖を清実白の事
はうらつてきえ文かしの衣きへるとかとて
　従一位兼教

尺し菱のおすし景文世のこゝろ[illegible]

迎し　従三位為手

[illegible]

藻壁門院[illegible]

[illegible]

後堀川院[illegible]

世のうさに秋のつゝ[illegible]

世間常なるに[illegible]朝[illegible]の花を人の許に[illegible]

[illegible]

[illegible]式部

清ぬまの[illegible]

枇杷皇太后宮かくれ[illegible]

[illegible]

少将

[illegible]

一条院[illegible]

月乃[illegible]

上東門院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

道命法師[illegible]

の嶋さらをとして　　安深弟

[illegible]みよりて[illegible]ん梅花ちるを行みし人をあさ世に

前大納言為氏母の百ケ日に一朶鐘をもとめ侍りて

持地に水精の金珠を梅の枝にかけてつかはすとて

平親世

いかゝりをしはしたるの花みくもあさにかりし人をこふらん

後京極摂政妻身ゆかりにけれは前中納言定家

も共積てつかはす　　従二位家隆

あしてしひおきてもすゝふ妻の美いつかしのさかしあらん

二条院かくれさせ行て又乃年の夏郭公をゆきて

冬河内侍

獲花してしひうつかはさしさしは中ゆきしさ妻の一ふ

世中の言はかなきことをとりてよめる

殷富門院大輔

妻の花さかくはなぬ枝の月みちてはけぬあるう世の中

建春門院かくれさせ行よりの枝うへをさせ行ける

此前のせんさいのさかりはるゝは女郎花のされ

[illegible]をとして　　中納言

寝ぬさゆうき世に枝の女郎花にしきしきぬ名をかりしき

松村年の十月太宰大弐重家女のしひ侍

[illegible]けり後

[illegible]　権中納言親宗

[illegible]世の[illegible]れ[illegible]つけて[illegible]

[illegible]　太宰大貳重家

限なき憂世の[illegible]

二条院[illegible]世行て後院に中納言典侍

[illegible]て一人[illegible]

前左兵衛督推方

[illegible]の月を[illegible]

[illegible]　二条院中納言典侍

[illegible]

前中納言定家母の[illegible]

[illegible]

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

後深草院[illegible]年乃[illegible]月の[illegible]

[illegible]

[illegible]　玄輝門院右京大夫

[illegible]

[illegible]年の秋乃[illegible]

けり

前中納言経親

源草の山乃石家に渋の林をうけさの多くはうへてこれ
父の遠忌にて仁和寺へまゐりけるに大納言師輔
是門の山郭公をしたりて首をこゝろ様をいはるめ
と申とりて侍りける返事に

大義門行宗

時鳥ことゝ極りにいとゝしくむかしのをしを忘つゝ聞く
待賢門院かれさせ給て坂六月十日法金剛
院にまいりたるに庭も梢も志けしまあひてかを
かゝ人新とせさりけるに行うめさせ行し事

まとゝ今の志りして衣つきせぬに日くらしの事
さらす空へ入れハ

堀川

君こゝろなをきの志けさ山里ハたゞ日くらしそうもに鳴なる
白河院七月十日かれさせ給にまれハ鐘侍なる

平忠盛朝臣

みもこん秋をまつ川へき七夕のまゝ御ゝさまいりけり
坂深草院の御服なりとて

永福門院

志ちきわしかちの秋乃秋の夜かゝる秋を忘しなる
たなし御事にお家して坂らみ侍なる

從二位兼行

世間をくいつくさ相もやるくさしたゝ神も露かたを
見しらす

後京極摂政前太政大臣

人の世は思ひなきにあらし程の道かもれひとつ志る露
今相流の御事れ後ふるき文ともの多く侍流
の御をあつて御うしまり事しもを志家しをれ
ふるをこゝろにしひ思ふ事のこゝわりて源の藤侍
をれは

前左兵衛督惟方

いとてのこゝろ此とは思へもなきへられ多くこゝろなり
世事に事わりてはしてのうたになりて侍々

うほにめしかへされ侍く建礼門院大原にたりま
しけるにふりて相中宇りにつをてもさ海くしひ
おろ事おほくていみしうかしく見へ侍々れは

前権少僧都全玄

今日うくてめくりわふまも悲しきは此世屋をてし別なりけり

前右兵中将資盛勇まりて後志賀の浦をる
侍々ふ風吹あまて後乃ふ川をこゝろにもかゝ海
けるりにもあらまりかなし思ひあらして横侍々

建礼門院右京大夫

兵衛ふ人にあふ人の海なるはあらき波にも立浦しまし

堀河院御事の後よめる

お中納言通房

いけるかは若乃今ゆきなりにきん衣の末となきそかけき
夏のやうにおひ見けり女さまりうちそこ[illegible]
かくちりにくかねとゆてよみ侍りけり

前大納言忠良

きけとなほ夏の何うとたらしてうれもうつゝのふらうきね
母乃身さりけりを九月ちり観音寺といふ所
にをくりをれて又の日ふと侍けり

従一位俊子

風ふて深山の里に君ぬをさそふもうらにをふハかつり恐
檀大納言長家大納言新信女にもみ侍けりを
くれて歎きをうを拙屋くとゝひ侍とて

後一條院中宮宣旨

かくてまもおくぬ御道のなりさはいふとこふもいとれさり
枇杷皇太后宮の御ふあに佛ぬくられをうにかき
里の玉を荻原保昌朝臣丹波守にく侍をうに
めされけりとなりとて

和泉式部

ねなくぬ涙乃霧をかけてたにむのうきりとそへんとうぶふ
紫陽院につきなりて瓚波国に侍けりをうれ

世行にまれハ知ニ論のかりにけり姫人のこゝろひ
て給ひ申つかしけり

岩湯作

君なくて久ら波詠に言れこし神のしつくをおもひ居るん
はしに給ひ此知なり母なくなりぬとゆゑて脇き
給ひておもひ姫の事ゆゑひおくらみ給ひ

儀同三司

うれおりにさてまし物を夜衣屋をそうれしてかきりなりれ
家にをくれて姫にしよ也

中納言家持

宮輝の世ハ昔明と志るものを秋風さむこ志のひけりと
小一条皇后宮三月卅日久れ給にけるなりしの
七月高松の女御又おもひ成にかれハよませ
給ひ

小一條院

おもひ其のくみ乃夜しらも生らかきねぬ秋うるすき
亀山院久れ世給ひし此去年の秋後深草院
うせさ姫給しを又姫なく哀明ひしなと女房の
中へ申送り給ひて

前大納言為兼

姫さ世の秋乃おかれ世深草やさり聖の窮も又きこぬなり
御申し

院四製

まことにかさねこそその後乃秋かけて浩々ふ霧もとりそうやは思ふ
同じ此忌の比九月はこゝろにふかみ侍り
良助法親王
うらしをかさみとしふ秋まさへかきねてまゝやはふはとりまん
中務宮家爲親王かれ侍りにけりをきて頼侍り
前參議雅有
はへつゝなれし昔のまゝなるはおよひや世をいうしきまし
前大納言爲家卿まりて又ちり乃仏事し侍
まゝ雅文の奥に書つきく侍り
安嘉門院四条

とまゝ力はありてかひなき別詠にはとさはぬ命なりもん
母乃ちひに侍まゝ此安嘉門院四条子にをとれて
侍らし事て浩かし侍り
中務宮家爲親王歌冬河
かけしれ浩まし霧のなこりとて袖なしまゝ秋の思ひ出
影しら守
平時村朝臣
なしひそとしりてもうきはめのまへに人にをとる別なりけり
一品貨子内親王乃許より村上のみとのかゝせ行へ
御拘やと勅て侍けり浩かりさらとく
選子内親王

[illegible]

後朱雀院の御事の後源三位白河殿にまゐり

ぬとすてつかはけり　弁乳母

御ゆへに物のかなしく接ねしく鹿のなく様に御ぞふらん

一　那久元年六月ハ条院御忌日に蓮華心院に

まゐりて世ひ物の事あるべきて女房のなりにつ

かはけり　前中納言定家

わしむべき人ハみかさむの徳にうさ身ひ河のなりに

よの夏

玉葉和歌集巻第十八

雑哥五

紀伊国にこゆき侍けり時むまひ松をこそよみ侍

守り　人麿

ほうんと君のむまへ入りし後のこ松かうれを又こつかれ

題捕へ詞花集えらひ侍りし時守を為ねて侍

されハまつ川桂中納言後忠守をつかはすとてよ

てうへけり　皇太后宮大夫後成

このまにおくらさてぬへきかなしさにぬりかけしとのたまはせ

遣し　左京大夫郡輔

橋女を　　寂蓮法師

いそかく宿もさゝめぬ波のよにうきそ抱ふ身とはなりもん

と佑乃見にて言ふ人侍りしの業

前大納言為家

杜津侍人のかをそのしてきくつゝ入しなまりしのたゝ

大納言は侍りし時家は十首所人にはよりも侍

りしは大納言三位所を送りて侍りしをとそ為

教ありしにはしくつゝしけ歟

入道前太政大臣

和所乃浦やかさをくなれもしかまりれぬむの光をそうら

返し　　前右兵衛督為教

和所の浦は為ぬ浦よりふ所の霧このなさけにそ称はなれ

新後撰集にもしく侍りし時貞時朝臣とぬ

らひて侍りれは　　菅原為子

けり此浦の友をたれしてさ称をそれ教なるぬ称しるなれ

返し　　平貞時朝臣

なく称をもよりしやはさく友衛をしらしめへそをさらん

松明集よりをかくして入侍事をさいて

中臣祐臣

まつ此浦は絶けなく濱子島名にあらはれぬ称をのこそ

かく

富小路殿永仁にやけ給ける時和歌乃芳本子巻
物をいりたるを後人のまわりそく給ひをつる
へとりてうちにとゝまりそとて紅のうちやうに書て
君乃中明る物にむすひつけ給ひ

前野白太政大臣

しらぬ火の煙乃すゑをたりそ立しよる和歌の浦
若浦を領給ける　皇太后宮太夫後城女

人なみに君忘まきにはしらぬうらの入口乃もし川敷なるけ
述懐歌とて　前大納言為氏

ほかふるハおやのをしへと軽めても方のさめにうさ世をいなん

夢をとゝさせ給うける

院御製

夏はさしぬる物のうちにそさめぬる後の名をとれ　名れ

極義門院

ありてきれ君てさめぬる後ひてうつも夏もりたるまり　名わ

入道前太政大臣

ぬるかうちハ今や昔に成るんむしやいさ乃夏にはんたつる

二条院親王光助

うたねのみかさ夏の程ちりむ乃程にむしりをそ見る

前原為仲朝臣

ゐるうちに夏はさらにきぬとはしたしの末にかたしなり

平義政

夏なしてまたこゝ海ともなれ抱をたゞあつけまうつてなりしん

平國時

力乃うきぬ心ひ○ようら夏なれいうつまゝ海なくさめ

小侍従大納言三位の夏にかたしてかれるさ海く

とて海のとおりしく侍まうり文道より文をこせ

さらとて書つけて侍ゆる所

しれ紫の森に心ひをかもし人力しうはさゆまし心浴めや

雜所乃中に

前内大臣室

朝夕にみくおとろかぬ夏の世はさしうりさりもおりしれ

子天百番所合に

従三位保季

山あくも海はさもおしいに人もまことになるはうりもや

為相院に右衛の中とさ中侍とてよめる

西行法師

おしむそおしまれぬへきは世のは身はまそこそ身をもたを

小侍従うきりなりしぬとすてつかりしけり

従三位教政

まれうまれいるへきたにさはそこしたしはしたしさりしを

道法法師世をのうまぬとすてやつかりしまる

能因法師

何事をうしさきそねとかゝん世はそれ身にそれ

隆信朝臣お家して侍けり時中つかうしけり

右原伊綱朝臣

いとひえぬうき身のことそ出しけれ家を出ぬと人をきくまも

殷富門院新中納言にさうへて後中つかうしけり

前大納言忠良

思へもさいかに身にハ様やらそ人のわかれをうしそうなりしに

前大納言成通世をうしさぬとすていひつかり

宇ら

西行法師

いとゝ人きかりの屋ゝりハおぬなり今古海とのみをとれば

世をのうまけんとそ山里に海かりけるに

右を大納言通忠女

なにさりに思ひもいつは苦衣うきわか山にはいくまけまし

小侍従病をもくなりて月比へにけりとすてさふ

らひにまうりたりけるに山程をうしたりしき中ゆ

て人にもきせぬ和琴のまひさなりしけるとす

て頼侍けり

西行法師

しの様に海をうつくなり守れ様なましうへと様ふ衣に

首みし人の世をのうれて侍にすりをかんとす

いとけなく思ひねかひし身のすゑにつかふまつるらん

題しらす　　慶政上人

うけれ身をはいつくにかくして今まても世にはめくるはかな

三日月を見て　　前太宰大弐高遠

うちられ月をかなひは猶もすく入山のそらわひしからけれ

ひかるやましくて里に物おもふは月をこそ

従三位親子

きしふみをは月をみるやとはれのかたみに袖をぬらして

もり

月をよみ侍る　　読人しらす

まつまてにかけてそ袖をぬらしつる山の端の月も衣をしほるとそみえ

従三位為子

あはれなるいつまてかくて衰りはつる世にゆくも世々の月

寄月述懐といふ事を

西行法師

世中のうきをもしらすすむ月の影は我身の心ちこそすれ

読人しらす

おもひあさきれはまつはりけにや深ぬらん袖の月影

山里にすみ侍りける比月のあかきをみて

従二位雅平女

世のうきにおもひいりぬる山の端をみそめてや月はいりけん

岩田社にまりける百首所に
をりしふしの東のかしきは月に隔れしの山れを乃雲
山里にて月のおもしろき夜よりも見侍ける
女御徽子女王
久賢の宮さへをきおく山に月にもあれ入りけるに雅
月乃晴是ける夜里なる人のもとへつかはしける
遊子内親王
やうくれさやかに見てぬ月雅にまちこまたにて人を恋しき
百首所れ中に
式子内親王
今たとて雅をかくさん夕へまも秋をいをくれ山の此月

秋の法師
持て出しうき世ハ月のそまそおれなけるハ心乃まうらさ
山里に住侍けるに此者よりも月さひしくみえ侍
恋しく侍ふれハ
増基法師
家をうふ人ようなけ世者みし雅の月をなすひ何らん
人のもとへ琵琶をまうつかはしける人にかたりて
延子内親王家ゆ人
四の結乃志へにつまく思ひおよなるに月に秋もわすれ
後夜のをとるひ志侍らんとてまおらせに満りける
に地にいりたる所のいとまくなくなるに月のうつり

よるとみゆくらん行すゑに

高辨上人

世中のせめてくるしき折しもや月さへかりの影をみすれぬ

久安崇徳院に百首奉りける中に月を

前参議教長

さやかなる神よハいつらの影なから月を今ハいかにまし

月をみて

清少納言

月みれハ老ぬる身こそかなしけれつゐにハ山のはにやかくれん

後徳大寺左大臣

西へゆく月の行衛そいかならん山のあなたも物うき世と

題しらす

前中納言定家

明ぬとも秋の夜数ハ渡しきせまれし

後法性寺入道前関白右大臣の時よみて侍りける百首歌の中に

宜秋門院丹後

何くをも前にくらんあはれまた露の命を

述懐乃心を

前大納言忠良

数ならてあるはあるにもなき身もなを世中にとゝまる哉

藤原信実

ゆくりなき光の露の数にいる秋の袖のあはれさ哉

鴨長明

わまにはいとふうむけはしまふ殺あらぬ男と心をのみなれゆきま

洞院摂政家百首分よりおもしろを

従二位家隆

そのとあし我心まもそられて世よりはしらぬ男をいとふ

述懐分乃中に　中務卿宗尊親王

かくなれはこまりの心もなれまし　うらうらは世のはさけなりけり

山階入道前左大臣

男もつらく世もうらめしきぬしくを思ひぬ物を涙なりけり

和光二年法皇よりめされまゐ百首分の中に述

懐　前内大臣

うきもうくつるさもつらしきかれとしらぬよりしく世をもとく

おもしろを　法中聖勝

しのそしらうめをれ分我男とて捨捨やらぬ世を頼くらん

鎮人しらを

あられ分男をうらひしなしはよりはとそく世をのかしまし

前参議為相女

よしさらはあるに両せんあるましのたしめにはみなかたりゆく男を

平政長

あつまにて男はぬりぬるもとのたしいそやすにまもそあけまし

述懐乃心を　平宣時朝臣

わとしたまはれぬ程の老乃身は命のうちのおもしも
中將四宗爲親王
いかにせんうむきそ後のうち世をはしてなりてしかなくさめも
よみ人しらす
表けよのまてくも世はうらうらは命のうちそ世にへりける
難宗乃中は　前參議爲相
そこちねの老乃よりひよむまれおひて久しくうゐまとそうら
日吉社ようかんくなりけり百宮宗の中は
前大僧正慈法
何とうくうむくふ乃ぬくらんこの世ようにむまれさる身の

述懷の宗の中は　院御製
いつまやまとき我身をつしまへしむ民のふ世人は
持明院殿にて影をさりて人を宗よみ給ける
おもいふことを　前參議爲相
もしまもしやうむ和宗の浦やうひおりをこの世に浦しまて
名不宗よりと給ける中は和歌浦を
恒三位爲子
和宗乃うらにしつむしきに同よみられん玉のうちをこそ世しもる
述懷の心を　恒二位隆博
とろかれ身をいふれも我へおり程をそこのむ家嶋の

世中にかりうきさ海にわかれけれ此をきゝ取るる人

はたかりしをり　増基法師

君をはまゝやたなりせいかゝてまゝにてなくさみなまし

別しらす　本院侍従

世中をかゝすも海に思ひしとわかれ方にいかゝ思ひなりけり

和泉式部

いかにせんいかにかとへき世中とうしけいかゝしをめいかゝ

世中にうき方はなくてわしとかふ人の家をとゝめ海しは

花山院御製

はかくとおしくしても月をつゐにいかゝかうへるはき

後頼朝臣

まれとかはつきそもいそん我をあようしめしかゝぬ人しなけれは

人の行をつかしけり　菅原雅規

いかそまれを海しとそかふをむかしにかうき事をしけさけ世なり

ゆし　鎌人しらす

いかにまいかうむかんをむしとも世にハ世なるぬ不ありやを

久しくまつらひなるを給くとゝぬ人の種へて坂に

せううこして侍れハ　少輔命婦

病ちりかひをくへさんあらはきしぬさんまう人ハ是もし

述懐方の中に　平忠度朝臣

なりしくれはりさもとしふんしうらはよつけつくらそりたてね
　　前大納言忠良
おもてありつんといふれはおもふれの人めれも聞しきかれ
　　積人しらす
うきれかるいく春秋をしきね月と花と代ふるおもひしく
歌く事ありてしたし世をのうまそ山深くもみ侍
ゆうは都なる人のりとよりしひとりしのなくて明くしし
夏世を捕しろ程の抱うさと申て侍ゆるまま
　　檢僧正覚魚
うむきても抱いとしこさ世事をもてぬはましてさそ歌くらん

つ程を捕うてさけ人の歌く事侍ゆうはみらす
侍ゆれは　　大僧正行尊
今うしろ秋方のうそてあるさ程を人と人とはおもふまりゆう
　　花山院御製
新しらす
なけくともいふともひはおし世をゆめ乃とくをおもひすしん
世事をしひなけさけるは
　　伊勢
情うねなれともうろおしまゝせられ程はうき世をそ
冷泉院の池ようさ草のあるを見んて
　　女御嚴子女王

[illegible]

雅奇乃中に　前右兵衛督為教

いかにせんあしゆゑ[illegible]

曉述懷といふ事をよみて侍る

入道前太政大臣

孫さめまそさしにかそふる我世にはわかぬとす紀方のさかをと

天台座主になりて侍りける述懷の奇おまた稱

侍をり中に　前大僧正源恵

わしゆゑの心に方紀そまかせぬるおもひあり此代のさるしに

寢覚述懷といふ事を

清平云稱

あしたの美うつとそ日紀ぬる都の稱ふり乃きむらなく

事ありて伊豆國になりされ侍りとまくこひ侍り

人まつりしをり　清平忠快

方のうれ人乃つくさりさりもとも百數をこそて過ぬる

[illegible]　前參議實時

おしむへき人をすき世を捨やらてふりしまそ方紀ぬ人

平親世

何とまた方のうき事を頼くらんなきをすてを捨たてし世に

述懷　平安時

寄海述懐乃心をよき世行うき海

院御製

伊勢の海乃あまれらけなかうをさしけ身を又ハ志間かすもる

御こゝちなやましく行ひしかけ

朝平門院

うけられ五月日をかうへくもいはまその身をうへかうのき

題しらす

従三位為子

人も世も心へそわれいくしけしいくうつりして今ハなりかん

雑御所乃中に

院御製

何しかも心ゆくなき寂しかき世人のをのやのさうれ世と

永福門院内侍

捨ひぬ何ゆへ行きうれ世をしかまちこれ行りし抱かう

百首所の中に

前中納言定家

身乃とてを世ちうりと志りてさまたりしかるへき世人の語と

日吉社に生りけり百首所の中に

前大僧正慈鎮

後とふく思ひ何へきさりしかなわふさらん世の紀なきけに

心さし君にふくて年とへぬまさむまれてもまるや知ん

題しらす

前大納言為家

いかれて心にはしまとりをこ紙をたりも人にかたん

萬葉集の詞一句を記して人々に示し申せさ
給ひしはひしりはきよくしたる事を
新院御製
天は日のひかりはきよくて寸世に人のこゝろ乃なをかしも
雜 寄れ中に
條子内親王
わしの道は時にあらはしさ給ひしとなりて
世事を思ひてよみ給ひ
權中納言俊忠
春の花枝乃和歌をみしなのなりたは苦れ下にしらぬ
猿蓑の心を
普光園入道前関白花台
いかしを誰にかたりてなくさん秋にも思ふ人のなり道
藤原則俊朝臣
みし秋の昔戀しきもかたるへきなりもなき世に成ふ
永福門院
過ぐゆく月日をうつせ物にわしは意しきる戀文も見えまし
二条院參河内侍
しひあらしはなく成てしまへしさしきをいはしん
前中納言定家にやうしみ給ひしさ其家の姫と
石大臣作りわたりてかまひ給ひしは八月廿日
定家の妻忌は佛事なりして人々に示し申給

けふは秋懐旧といふ事を

前参議為相

めくりあふ秋のなかきにわすれぬ世とこそ神無月しけき

難波よりそ　　前参議家親

すのうきはなにゝ世そてりとおもふにはまてはてらはぬ

あそ同しむかしとはいふも柿木世のならひかりなれるなれ

　源義行

曇らぬくもりけりと人ての世さきりなれは侍侍る

　小馬命婦

はかなくてみるうきりとはなにそれは心をとるとてそ侍り

人麿墓に幸詣まうてゝ書つけ侍りける

　清輔朝臣

あはれなるおもひけるかな昔の世をもさりなきもそれは

柿本の墓尋ね侍りて柿本明神にまうてゝ侍

侍けり

　寂蓮法師

古き詞を海のかたまても鶴まては神まうるさむれりとみえまして

柿本へまうてゝけふつとゝに在原なるをみてくらしき侍や

りけり

　従三位為子

かこちけるかみの神をはかりて神のむかしの詞とこそもかなは

神智にまうて参る人のうへにまうりなかりて

又お侍けるにをそりに侍りてきて侍りし人のうも
なりまゝ中侍りし　大僧正行尊
行しらぬ命もせしハ相しきかわらハわ世にわひとしられ
紀伊國をりし海と戸所の石をとりて文にて志の
あらりにをきて侍りしに書つけ歌
富井上人
まれさりて後に思ひ人なくハさひてかゝり孫たりし海の石
後源業流に時又官とて官廳より国院へ還
御なりて後より見侍りし
藤原伊

やみまてありし雲居乃来しきハふるき紙無ふかなるとまり
懷舊の心を　藤原秀哉
ありしを一夜のなりし見る夢をはめてうをきむしなりし
清中行深
いかれハつゝきむしと思へともな紙志のなれ思ひなるらん
大江貞重
今更にかゝる物と志りなりし志のなれハなれむしなりしなり
河三位廣範
心にハ口をれを思ふ心にしてもかさ海なりの折りひあうなき
新しらす　前大僧正慈順

谷川の東北葉かくれの埋みなるもゆくしたこそ深もけ
これはある人おまし社にこりまして念佛の教友
はおもひ今深くうまれたれと中人侍りを又
志川かにひとりつくしかへ今れと中人侍りれは
いまさか誠にうきかしんとおもひつかすくおりひて
稱ふる夢にかくしたんけるとなん
孫濱新むし人は西秋の月なれやせ晴ねとも雨にこそ
ことは志如常にまうてし超世の悲願のなの
りしき事をしひなかし我方の業深をりき
ことに於ては心ひくまとろこそ侍りる夢より

きたる紀御あるにてつけさせ行けるとなん
極重(ヨイ)むまれんとしふ心ゆて南無阿彌陀佛といふ(ヨイ)忘
先は石清水社に御うてし念佛と誓生ぬすを
と行里中けるの人の夢にかくなんつけさせ給ひる
以かにせん日は暮かさに成ぬまと雨へけるへき人のなすさ世を
これは康平の比ある僧清水ちに通夜し
さりける夢に見てきるとなむ
花衣かさく紀山は色かへくりみちのあるに月をなるよ
此哥は豪意法師いまたお家し侍らさり
ひろ時粉河乃觀音に御うてし發心して

ありとこそ思ひ進まし法の道めくらし聞はかゝりけるかな

釈覚上人

法の庭田のちまきにそかゝりてはなさけなかりき

丹波経長朝臣

世をこゆるちひろの一つを取る法の水みちぬる人の心なりけり

権僧正憲淳

跡もなき雲を南にて明ぬともなほさとりの朝をまちけむ

高山寺にまうでて清滝川のほとりにてよみ侍りける

岩屋入道前摂政太政大臣

世にふかくかゝるにも心清滝川のきよくもあるかな

保延二年勅語ありて千僧をこひ侍りしついでに涅槃経序品の心を

民部卿顕頼

ひとりのみおもひいりさの山深くみちをたつねてさとりもせよ

同し心を読侍りける　久我内大臣

法のため深山の苔にたもとかへて我身のこのみたきゝをそこる

仏既滅度如薪尽火滅乃心を

法性寺入道前関白太政大臣

人の世の法はいひとても身のもとにたきつくすまて燃えはつるまで

方便品若人散乱心乃至以一華供養於画像

漸見無数佛　法印静賢

ひとつゝにしめてみる花のえにやかてそこのみちをこそしれ

化城品の心を　権大納言行成

世中はなにをまたなん法のみちさとりのやとはあとそしらるん

前大納言為氏かはりにて仏事の心をよみ侍りけるに

一品経すゝめ侍りし時静余品を　平宣時朝臣

小車のはこひとゝへはなれはむかしなかなかにかはるへき

釋教の心を　素暹上人

わけ入てみるやと人やまたれけん鷲の深山の花の一枝

信解品周流諸国五十餘年の心を　藤原親盛

あつれゆきしきのけれ守おまりしらふやうかしほうされ哉

薬草喩品の心をよませ給うける　崇徳院御製

ちくさなるその草むらはひとつ雨にそめてなるらん

授記品の心を　法成寺入道前摂政太政大臣

いまはみなそて佛のなにゝなりとや人はさきにしらなん

化城品の心を　読人しらす

かりそめのやとりのみちとしりなからはるかにこゆる山そはるけき　種頼

廿八日宮中に五百弟子に乃ゑをよめる

平經正朝臣

衣をはなりと思はぬされさに涙乃玉をかけそへ清

おなし心のこを　前後遠

点いのうらにつきし衣の玉ともむりの夜にあひてよりけ

後感十三年紀事に前中納言定家一品經緯

養し給ける時人詠品のこをよみくつかしまる

常盤井入道前右政大臣

かれなす山の岩ゆれ思ひ水いけまて苔はしきにまみ乃ん

續をさて給ける釋教の字は熊野へ生けり

中に同品を　法眼源承

まつ孫かひ人のうちもこれしなるもれてうつ波の下草

同品今我会過去無量諸佛法如今日所聞の

心を　續人不知

むりし今かゝ見をかけてしるのとかけ来てよくすりやハ　まる

同品の心は　前權少僧都源信

さ紀の人何か為ゑてんなりしときこれ紀にしなんと

法師品

志何かふく法とく人今たのりしきつ甚しみちひくつかひ　心ハ

寶塔品を

[illegible]

前参議康能

かなくまはねひりもおろかれてゆくもしらぬてゆくも月銀

殷富門院大輔人見たり郡て紅葉をこなすと

て人をも尺教なりませ給ひなは

檀中納言長方

うれつれしとも此家のうちとに法の海にはまゐやいるらん

待賢門院中納言人をすゝめて法華經廿八品

なりませ給ひなは梶葉に採薪及菓蔬法時

泰教与

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

法師に又如来滅後後若有人同妙法蓮華

經乃至一偈一句一念法話云我亦与授阿耨多

羅三藐三菩提のこころを

前檀僧正實聡

偈りのなさしれもの末乃露法の世かけて祭りをくれ

勤持品をよませ給うまゐ

崇德院御製

[illegible]

安楽行品を

大藤内行宗

せとゝもにみ法をきゝてもとくしはうれしくあひぬるかな

壽量品　一心欲見佛　不自惜身命

勝命法師

かりそめにうき世はかりの夢さめておなしく分まつ法

わすれぬのこゝろをしらせぬらむ

崇德院御製

前大納言公任

月のいるさ人のあるれはなかりこそもおもはさりけり

おいのさ人はおれはなくもに鷲の峯なる月はのとけ

不輕品

寂蓮法師

いそのかみふりにしきみをたゝさくも君のみのりはそはさりせん

藥王品　廣宣流布　前大僧正慈圓

法乃花ちらぬ宿よりたちまよふ鷲乃高ねの山おろしの風

法華經の心を　前大僧正公伊

春にあふ花も今よりにほふらむあまりの門の山風

母の方まうてゝちちまはりける日法華經書供

養しけるとて　後一條入道前關白太政大臣女

まとゐせんの庭にやすみ給へけふの法のむしろ

諸佛出世爲令衆生出生死入涅槃但爲救

衆生之苦二見八耳　光俊朝臣

去乃面杖の時無と世にかりは花や紅葉のこゝろまれ也

無量義經四十餘年未顯其實の心を

法印獻圓

四十あまりの後世ひかるとはれ今たちす鷲の山風

維摩經の心を　小弁

夕暮れ空にたれひくうき雲はあはれ我身れてまれ也

心經の心をよめる　檀津師淺寛

地とふ心ひしとけは法もなし夢さめたけかぬなのくら

金剛般若經　紫來所得無實世虛といふこと

僧正公朝

いけるりも海ともをまはかりけりまゝひし我の心まそまく

無量壽經嚴淨國土皆悉觀見

源親長朝臣

晴る夜の雲井乃里れかすくよきまれ光をなくてうる

五葉の中ま佛を　後京極摂政前太政大臣

くらりし雲はされりしれつきてまたうへもすくもめる月

尺教奇よみ侍ける中に十界乃心を

法三位為子

うけかゝるとの姿乃ほとくもたゞ心よりすまそあり也

聖應來迎の心を　右原資淺朝臣

まよの苔乃露さへぬるゝ人はちらちらすれ花にやちらぬめかなと

従三位為子

其の雲棚引くちらちらあまりぬるのもりてまちかなそしかな

増進仏道楽　前参議教長

誰もこれわかちはてゝかくる道にまよひなからもおもひかな

思ひ入て深き流れへまよふうき世の中をそむきはてしな

不飲酒戒を　前大納言忠雅

世の人のさかしき心にまよひすかりにもかたらひさためん

為兼すゝめ侍し一品経の寿量中に心経の心を

入道前太政大臣

これよりもはてはこのよへそれ今をさかり乃花と見るらん

釈教乃心を　後京極摂政前太政大臣

明らかに宿れる山にかくるゝのちにはあかき人のまよひそこゝろさる

永福門院

わかちなき心の宿にすめる月をのかれかたくおもひしるかな

前大僧正源恵

秋もはやそらの宮のうち寄清つきそ心にみてる秋の月かけ

前大僧正道玄

かくむまれ心乃うち秋もみまさる三井の清水にすめる月そ

樫僧正兄園

まもすらはとはしくら我袖の濃まやとる去日野の月

法相宗は三國傳来してね承いまはしすると

興福寺にのこれと学ばるゝを思ひて

前大僧正良信

三河の國なれさせぬ法のあるをうるなりてくむ人そなき

尺教方の中に

前大納言為家

多くれこのり乃花にむかひてもいかて酒をのはらひけるまん

お大僧正道玄

いかはせん十のはらひにはひはらてもしのもやこれをさらりゆく

源来生死乃心を

とみ人我らす

菩提をしらうめ小酒にいおて表いて表のさひ○ふ心ん

久安百首哥に釋教乃心を

紛賢門院堀河

あらはなさ玉をこめてうもしゆひのさしてうれはとしてさけ

月によせて極楽を称ふといふ事を人のよませ

侍りしに

法橋顕昭

なにしやまそかふて月にしらしてん我も雨にいきくふあり

常行堂の引聲乃念仏を聴聞し侍て

前大僧正忠源

度お能度他の心を　盛弘法師

山ぶかき苔のしたくちにむすびしと人とうやす苔乃うをたし

百首ゆ句の中に　後鳥羽院御製

ちるうらや佛の花にたぬまし　しきみの枝にあれる白雪

雅成親王

ふねよしをしぬるやをとにはかんて六の夜にあしもやすめは

為頌悩賊　蓮生法師

浦にまかせあまのぬき衣なりしかひぬさのこなけて無は白波

誓以智恵水永洗煩悩塵

前大納言忠良

長夜に浦よふ苔衣もさむしたりんをあらぬ濃のをとる

輪廻生死の心をよみ給ひ

中原師季朝臣

いさしらぬ世をうしといひても又何乃力にならんとしん

宮治にまうして何乃魚にすめてい海をこるひ

經法書しるし給て

法成寺入道前摂政太政大臣

うら川乃座に志何めいるかりをおこなる様にもしひつる

八月せるあまりは加寺に来りたるにかり的の月く

まるくて池のうみ乃様なりにかきさしめたる月

ゆえ我ふか福田なる事ぶいかられて請侍ける

高弁上人

たかみつゝ志ましやうにこゝまゝんから代志さそし法も清ゆ

京極前関白家の六十講の持地に佛のおおれ

花をこせさる人乃心さしぬくちきれる花なれハ

此一枝もきゝハさゝるんとして侍ける返事なり

はかなしけり

二條太皇太后宮拾遺

たくひなきゆきのあまれ花ハこの一枝も小かハさゝめや

子手經の心を

法印遍秀

かくて樹も又花のさく松あれハ我方のなんを思ひ出

仏法書し侍ける時尊師に菊枝にさして送り

侍ける

法性寺入道前実白太政大臣

たくひなき法をきくの花なれハ法もまゝる罷ハ露のこゝろ

執教法師乃中に

院御製

さめぬまの御ゆいのうちの心にて養うつゝも何なくへき

般若心經の牛竟宣れ心を

前大納言為兼

むなしきをきゝめをりてそのうへにより代つゝなりとみこゝろ

二月十六日温槃乃心をよませ行うまゝる

院御製

国立公文書館
National Archives of Japan

玉葉和歌集巻第二十

神祇哥

あまてらす月乃光ハ神塩や門志の縄のうちとくもなし

此哥ハ両行法師太神宮に両うてくちうりにあらうきれ外にて心のうちに法数なりて本地を

原そあらへきにあらねに垂迹のまへにちりく

来らさる事を思ひてけ給てをこしまと語

こけるにつけさせ給ひけるとなん

はしくと思ひしことをはなしひとけなくひの道をこれ山のこうり

此哥ハ春日社の廻廊法くられ給ける時おもん

神乃つけさせ給ひしとなん

いにきよれ心このこれ乃法のよをも両ハ心のすまさるめや

是ハある人はくしのひこれ山に移りて後世の

事祈申をつゐくよいさきよ此ひこの宮れ

池水にをさはれ心を又ハをかさしと思ひつけて

両ふるこ給ける筆につをさせ給ける所なしとなん

十日あまわせにいふ此御戸ひらきこれ給ふ所にいらくそ

これハ正蓮の法賀茂社の御戸れひらきこうり

来りて通夜しさりをる人の筆につをさせ給

をうとなん

いよ〳〵國うち〳〵郡のうをまそもまれ〳〵なれ世をとそ〳〵
此寺ハ住吉の社へいやしき男の祭りて侍りけり
奥と食しけるかまそかりけるまゝ
あしき事まやとおうれ男て御とうこと貴
ようくなし心つけさせ行ぎり
侍まひぬ所ゆへこゝまき乃國やしろの郡ハたりけれ
此寺ハ法ゆしき侍ぎり人の子ハ云てやまひ
て日数かさ所りぎり侍おやしも臨さて熊野へ
来りまへきとりし新書をしくをさなりしを
こゝろけるを年月重く七歳にて又をもくに

はしひ侍る時謹宣ありけるとなん
まれゆゑんゆきてまもらん般若さい輝然のこゝろ乃わん
此寺ハ自ら愛し上人般若基といふ所まうつりかて
春日大明神を勧請しなんとしひ侍るにかく
つをさせ給ひをうとなん
夜もすがら佛のはらをさるゆまとへ人ありもちつかしき
見ハ熊治三年の春此新熊野に本山の
宿ともうつり并くをとるひなりしまりに式人
第をひきてまゐなんこゝ此かさしけり
高おう念佛を中人の侍りをいとしく完て

天台座主になりて侍りけるとしよみ侍ける
良助法親王
昔よりわか立杣の神のちかひもしられけり仰く方もちとせふるらし
日吉社興盛神院にまうて侍りける時月を
くはしけるによみ侍ける
前大僧正忠源
神よいかに秋の月に照らしても世や照らす志賀の山もと
貴布祢にまうてゝ讀侍ける
増基法師
きふね川の流れに深き神にこそ頼む心をおもひしらなん

熊野にまうてゝ御前にて讀侍ける　大僧正行尊
人よりもかゝる心をはちぬれは神そあはれとおもふらん
神祇の心を
後白河院御製
宮路乃松は千とせを祝ひきて万代まてのかけそたのまん
年久しくおもひそめて頼むかみのよるへを又たのみ侍ける
かけてよみ侍ける　普光園入道前関白左大臣
おほはらし春日の野への若菜も神のめくみにまかせつらん
春日社にまうてゝよみ侍し
前大納言為兼

神祇の所とて　法印教舞

男山峯よりてゝ寸月新かくりぬ人のこゝろまれまむ

前大納言公任法附家のはまて侍ける時いひ

ほかたしけり　頼人しゝ寸

はし水かき寸放浪うちるひき君まそ神也ふませ侍ける

正元元年御譲位をくなりて内侍所に行

幸侍きるまゝらこ侍けり

後深草院弁内侍

おほかさ此世ハうつるともまれかゝ見渡ことをかけしかきれ思ふ

見しらす　権大納言冬基

見かきぬりりぬあたりハ神さひて月まむ雅人にさ神の

小扇

あめ乃ほこ神のますてふ三笠山かけにかくれぬ人ハわしなし

慢法性寺入道前関白太右臣に侍ける時家り

百首家よませ侍ける

皇太后宮大夫俊成

おきれこゝ野ことをかけし侍ける此書りや今ハ思ひまゝ

神祇乃ふを　中臣祐賢

去日山神のめくこゝ昔ましてはしかる小乃荷なこ

大中臣泰宿

題志す

法印良守

此熊野乃東北山の瀧津瀧にこゝせうぬまし苔れ衣を
十月たりかゝ茂まおりり晩かゝにかゝみ侍ゆる

増基法師

瑞籬にぬるゝ河君を白ぬのゆふしかくしたひけるれ
それかゝにまわけるまつりなれかゝるなるひに世をゝ
うまして後も賀茂社に年ゝ成て
四国のかゝ入洛のしまうゝ又ゝりまつるぬことりや
とて仁あ三年十月十日夜年りて弊まつる寺と
て守れおの社乃りとてたしかに法施なりけり

社本れ君の月はのくまてさよりも神さひわれ
に見て侍ゆれは

西行法師

所こまろしてに波乃ゝ海ゝ又山川ゝ思ふわれは
日吉社に三十首奇なりけり中に

法橋春誓

ふりとゝ法のこゝ山をゆりゝそゝぬりとに屋ゝ神さゝうけ
ぬ法性寺入道前官家百首奇に神祇の心を

皇太后宮大夫俊成

それかゝに初見し来ふれしとあれはかけよ賀茂の川波
賀茂社によりて生りゝ百そ奇れ中に

前大納言忠良

きりとも此ほれはたのこしいかへもうらへき男と神はしきれん

熊野新宮にくらみ侍けり

中原師光朝臣

あまくさら神や称ひとこゝ下なの濃にちりきちきれきれき

神祇の心を

權大僧都清壽

君が代を神もさこそはこくまれくなきの事なれこきはりれ

敬恵為守

皆人のいのはんもことなりにうじかねこちを神やうくらん

百首守れ中に述懷

參議雅經

神垣にひくしめ縄の結まして君につかへんことをしうけ

立湯山にまうでくらみ侍ける守の中に

鎌倉右大臣

伊豆の國山乃南にいつゆのもやきは神のしるし也

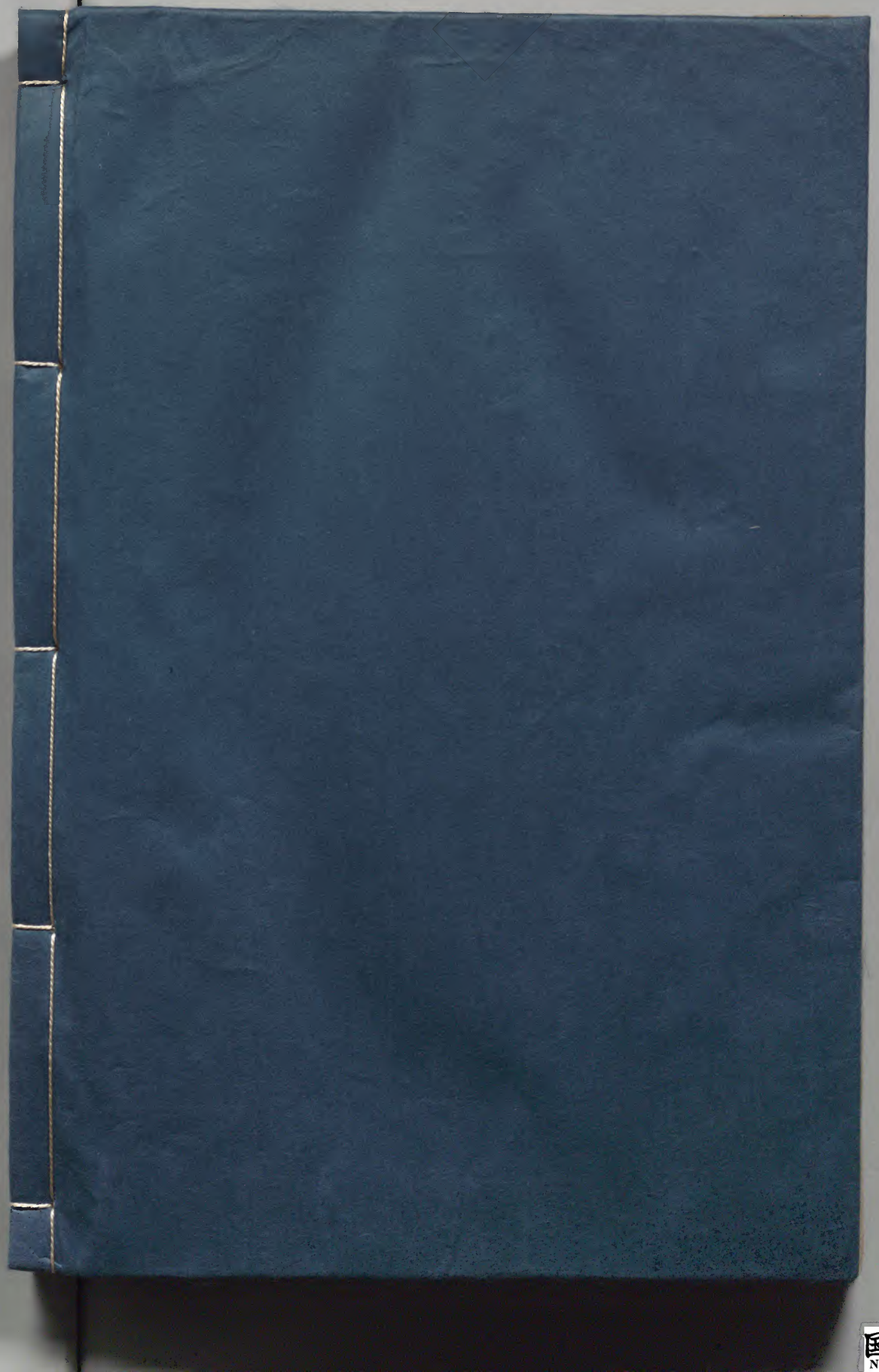
和元百首守なりけるに神祇

二尺法親王光助

ひと何まう世をまかるとし詔さすしらもの神乃神の心を

三種の寶物乃心を治一位教良

神代よりこゝきれさうしてさうしてこよわしいこの志すしとそ



国立公文書館
National Archives of Japan